韓国語を学べないでいる

神里雄大
Yudai Kamisato

5/17 AM 1:00、ベルギー、ブリュッセルのDe Brouckere駅付近より、滞在先ホテルがあるLemonnier駅まで歩いている。1.6キロの道のりをMaurice Lemonnier大通りの右側を歩いている。Anneessens駅に差しかかろうとするとき、前方のHYDIAケバブ店から三人組の男たちが、店員に追い出される格好で歩道へ飛び出してきている。店員とどうやら口論している。が、フランス語？ のため理解不能。私は、通り過ぎよう。三人の男のうちの一人の男、タバコを吸うジェスチャーを交えて私に「＊＊＊＊シガレット！」と言っている。

ブリュッセル滞在3日目、アラブ系ホームレスの物乞いをことごとく無視している関係か、私は「NO!」と言っている。

男、20代前半と思われるアラブ系、酔っている様子はなく「なめるなよ、持ってるだろ」とおそらくそのような発言と同時に、私の右の二の腕を乱暴に掴んでいる。

私、なす術なく「NO! NO!」と言っている。すぐにほかの二人の男、私を包囲、そして二の腕男を中心に異国の言葉が飛んでいる。他の二人のうちの一人は、私にはこう言っている、「おい、やめてやれ」と多分。彼は私の味方のように私はわずかに思っている。しかし彼は私のショルダーバックを掴んでひっぱっている。鍵や現金の入ったバック、私は強く掴んで離さないでいる。発言はことごとく理解ができないでいるし、私の頭はぼんやりしている、一方二の腕男は一瞬の俺の隙を見逃さないので、俺のバックの外ポケットにあるiPhoneとAudio-technicaのヘッドフォンを素早く盗んでいる。走り去っている。俺の悲しい希望のバックひっぱり男は、「なんでそんなことするんだ、俺が取り返してやるよ」と、二の腕の5秒後くらいに走り去っている。もちろん逃げている。俺が盗難に気付くのはその5秒後。もう一人の男は……印象もなく顔もわからず、三人いれば一人は影が薄いものだ。店員はというと、俺を見もせず、両手を逆さにして広げ、胸の高さまで上げている。それから店に引っ込んでもう寝るだろう。

5/19 PM 11:00、李丞孝と早稲田の学生の早坂と、De Brouckere駅近くのクンステン・フェスティバル・デザール、フェスティバルセンターでまずいプレートを囲んで食事をしている。李丞孝は、韓国からの好青年で、東京で演劇を爆発させたいフェスティバル/トーキョーのスタッフだ。俺らは、議論を爆発させている。

俺「これからは（東）アジアもヨーロッパのように、強力なネットワークをつくり、互いに高め合い、そして俺たちが疎外感を感じずにはいられないヨーロッパに対抗しうるアジアンスタンダードを構築すべきである」

李「同意」

俺「そのために、議論には不向きと近頃考えている日本語（これは私の考えだが）、と知らないが韓国語や中国語ではなく、議論に向いていると思われる英語を使い、通訳なしで対話すべきだ。最初は稚拙な結果を招くだろう。それでも通訳を介すべきではない」

李「日本語は韓国人にとって、習得は意外に容易である。その逆もそうだろう。だから互いの言語で対話をするべきだ」

俺「互いの母国語を理解するにはそれに費やす時間も制度も整っていない。理想は君の言うとおり相互の言語理解だが、まず第一歩として英語ではないか」細かいところは記憶があいまい。こんな会話。早坂さん、その後元気？

6月、東京西巣鴨のお好み焼き屋にて、俺は李丞孝の言う、日本語を母国語とするものにとって、韓国語は（英語と比べて）割合に習得が簡単であるという、説得？ に完全に納得・同意し、翌日くらいに「やさしい韓国語入門」を購入している。だが、多忙を理由にまだほとんど進めないでいる。

神里雄大（演出家・作家・岡崎藝術座主宰）
1982年、ペルー共和国生まれ川崎育ち。2003年早稲田大学在学時に岡崎藝術座を結成。06年『しっぽをつかまれた欲望』で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞を最年少で受賞。09年『ヘアカットさん』が第54回岸田國士戯曲賞最終候補作品にノミネート。近年は、演劇作品の演出のほか、小説やイラスト、詩の分野においても活動の幅を広げている。F/T12には、F/T10公募プログラム『古いクーラー』、F/T11『レッドと黒の膨張する半球体』に続き3回目の登場となる。

隣人ジミーの不在
岡崎藝術座

11月2日（金）～11月6日（火）
於：あうるすぽっと

©神里雄大

日常に根ざした言語・身体を、劇的で鮮烈な表現へと変換、昇華する岡崎藝術座。この春にヨーロッパの演劇祭を旅した経験を経て、主宰、神里雄大がたどり着いたテーマは「隣り」。「隣りの芝生は青い」などと言うとき、私たちは何を基準にしているのだろう……。韓国でクリエーションに取り組んだ本作で、未知の隣国との出会い、対話を図る。神里が見つめる「隣り」から浮き上がる「日本像」に注目したい。